

## 2 知床の概要

### (1) 位置・地形

知床半島はオホーツク海と根室海峡に接した北海道東北端にある半島で、網走支庁管内斜里町と根室支庁管内羅臼町・標津町にまたがっています。

一般的にはオホーツク海側は奥蘂別川<sup>おくしべつ</sup>から東の部分、根室海峡側は忠類川から東の部分、山岳部は根北峠から東の部分です。付け根部分の幅は25km、知床岬までの長さは約80kmという細長い知床半島の中央には標高1,661mの羅臼岳をはじめ、知西別岳、硫黄山、知床岳などの山が連なっています。海岸は火山活動による隆起と海氷による浸食で、高さ100m以上の崖状に切り立っている部分が多いですが、知床岬の段丘や、ルサ川やルシャ川河口など広い流域面積を持つ地域もあり、複雑な地形となっています。

半島は300万年前の海底火山の活動で基盤がつくられ、25万年前には褶曲活動で陸上に姿を現した後は、陸上火山の活動により知床連山がつくられました。現在でも硫黄山と羅臼岳は活火山に指定されています。

気候は亜寒帯に属していますが、細長い半島が北東方向にオホーツク海に突きだしていることから海の影響を強く受け、また、山々の連なりや複雑な地形により局地的に特異な気象現象が見られます。春から夏の羅臼町側は涼しく斜里町側（ウトロ）は暖かく、時にはフェーン現象で暑くなります。

また、冬は逆になるなど、知床連山を挟んで海岸部では天候や降雨量の傾向が相反し、風も羅臼町側は春から夏は南の風が、秋から冬は北の風が吹き、斜里町側（ウトロ）は一年を通し北の風が吹きます。

冬季間の一時期、オホーツク海は流氷で覆われますが、知床半島は世界で最も低緯度で海が凍る地域の一つです。

### (2) 保護地域

知床は、環境省、林野庁の所管する各法律に基づいた自然環境の保護地域制度が導入されています。

知床の保護制度の充実ぶりは、他の保護地域を大きく引き離して国内トップレベルです。知床はそれだけ、重要な地域であると言えるでしょう。

#### ① 遠音別岳原生自然環境保全地域

(1980年 環境省指定)

国内5箇所の原生自然環境保全地域のうち最も広い面積を有し、国立公園よりも厳しく保全されている。

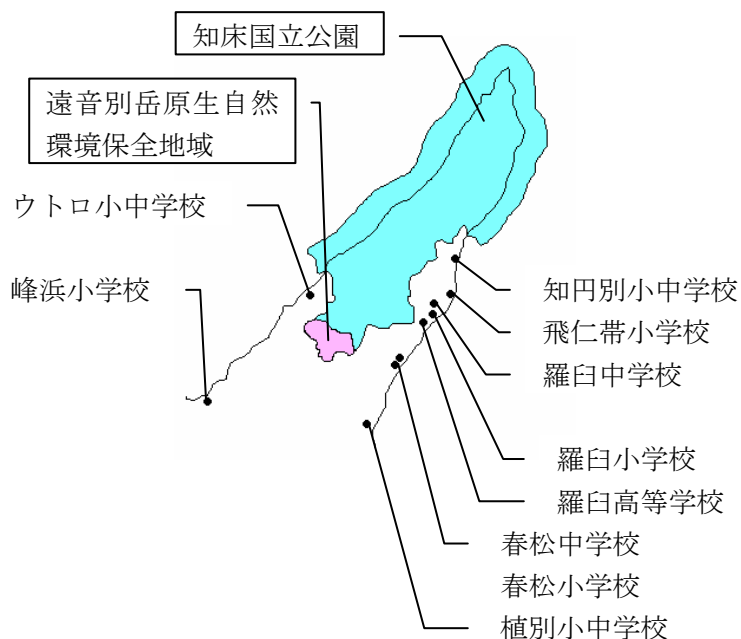
(自然環境保全法)

#### ② 知床国立公園

(1964年 環境省指定)

特別保護地区が陸域面積の半分以上を占め、全国でも最も保護に重点を置いた国立公園といえる。

(自然公園法)



③ 知床森林生態系保護地域

(1990年 林野庁指定)

木材生産を目的とする森林伐採は行われておらず、生態系の保全を最優先とする地域。

(国有林野経営規定)

④ 国指定知床鳥獣保護区

(1982年 環境省指定)

鳥獣保護区では鳥獣の保護繁殖のため、鳥獣の捕獲、殺傷の禁止を定めている。

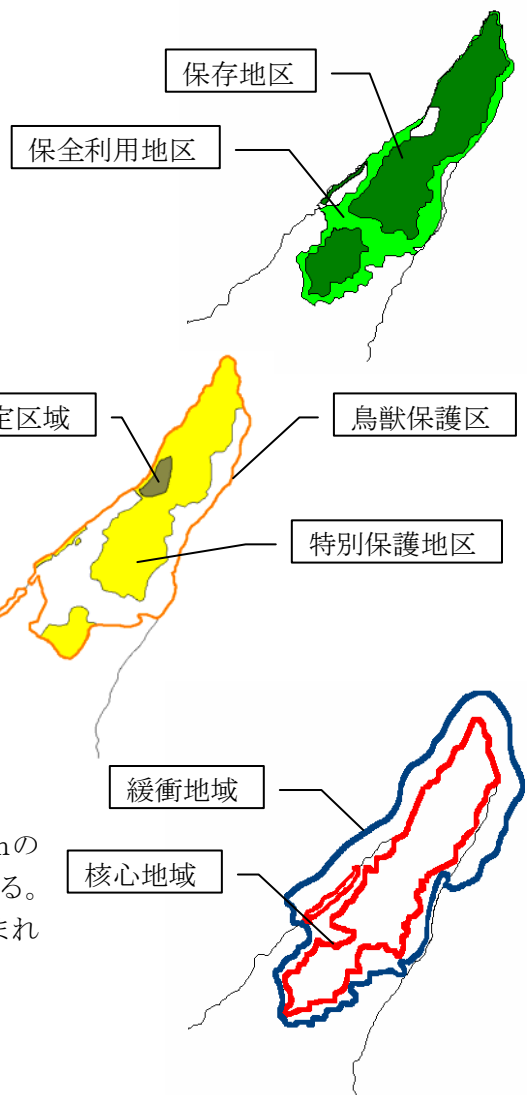
特別保護地区では、さらに、一定の開発行為が規制され、特別保護指定区域では、さらに、車の乗り入れや撮影等の行為が規制されている。

(鳥獣の保護及び狩猟に関する法律)

⑤ 知床世界自然遺産

(2005年登録 世界遺産委員会)

知床半島の中程から先端にかけての陸域と海岸から3kmの海域が世界遺産の範囲で、「核心地域」と「緩衝地域」がある。遺産の範囲内には、上記①～④の保護地域のほとんどが含まれている。



(3) 植生

知床半島はミズナラやイタヤカエデなどの広葉樹と、トドマツやエゾマツなどの針葉樹が混じり合う針広混交林が中心で、本州では2,500m以上の高山帯の植生であるハイマツが、700m付近から見られるのが知床の特徴です。

また、高山帯にはシレトコスミレなど様々な高山植物が生育しており、千島列島と共通の種が分布していることが特徴です。非常に強い風が吹き付ける海岸には、ガンコウランなどの高山植物が見られます。

(4) 希少種

知床には国際的希少種（国際自然保護連合 IUCN のレッドデータブック）が多く存在します。

シマフクロウ（EN：絶滅危機）は、世界最大級のフクロウで、全世界で北海道、国後島、択捉島、サハリンにしか生息せず、その数は全世界で約200羽と非常に少ないです。沿海州（極東ロシアの日本海沿岸）方面に分布する別亜種のマンシュウシマフクロウを加えても、その数は1,000羽程度と推定されています。

ミズナラなどの広葉樹の大木の樹洞で繁殖しますが、森林伐採などにより繁殖できる大木が減っており絶滅の危機にあります。生息数が少ないにもかかわらず、北海道に生息する1/3が知床に生息します。

河川近くの森に生息し魚を主食とするシマフクロウにとって、河川に豊富な魚がいることは重要なことです。

また、知床にはシマフクロウの棲み家となる広葉樹の大木が残る原生林があるからこそ、シマフクロウにとって重要な生息地になっています。

オオワシ（VU：危急）の繁殖地は、カムチャッカ半島、アムール川下流域、サハリン北部などロシア極東部のみであり、世界で5,000羽前後しかいない希少種ですが、毎年冬になると多くのオオワシが知床に越冬にやって来ます。

体が大きく揚力で飛ぶオオワシにとって、餌の確保が難しい厳冬期に体力を消耗しないで簡単に餌がとれることは重要なことであり、冬の羅臼はスケトウダラの漁場であり、船周辺の流氷は止まり場になり、網から外れたスケトウダラは労力をかけずとも捕れる格好の餌でした。また、ねぐらになる深い沢があることも越冬地として重要な要素になっています。

#### （5）生物の多様性と生態系（生態系の図についてはP31を参照）

知床には食物網の頂点に立つ猛禽類や肉食類をはじめ、多くの種が生息することが特徴です。

知床での食物網の出発点は、流氷がもたらす栄養分によって大量に増殖するアイス・アルジー（氷に付着した藻類）などの植物プランクトンですが、その植物プランクトンをオキアミ等（動物プランクトン）が餌とし、サケ、マスやクジラなどが動物プランクトンを餌とします。

そのサケ、マスはヒグマやオジロワシ、オオワシ、シマフクロウが食べ、食べ残した魚や動物の糞が森を育て、森が豊かになることによって、草木を食べる虫が増え、茂った木から虫が川へ落ち、魚が食べる、というように、海、山、川でつながる複合生態系の自然環境だからこそ、知床には多くの野生生物が存在します。

#### （6）知床世界自然遺産

2005年7月17日に南アフリカ共和国のダーバンで開催された第29回世界遺産委員会で知床が国内3番目、道内では初の世界自然遺産に登録されました。

該当するクライテリア（登録基準）は次のとおりです。

##### ①「生態系」

- ・ 知床は北半球で最も低緯度に位置する季節海氷域であり、季節海氷の形成による影響を大きく受け、特異な生態系の生産性が見られるとともに、海洋生態系と陸上生態系の相互関係の顕著な見本である。

##### ②「生物多様性」

- ・ 知床は多くの海洋性および陸上性の種にとって特に重要であり、これらの中にはシマフクロウ、シレットコスミレなどの希少種が含まれている。
- ・ 知床は多くのサケ科魚類、トドや鯨類などの海棲哺乳類にとって世界的に重要である。
- ・ 知床は世界的に希少な海鳥類の生息地として重要であるとともに、渡り鳥類にとって世界的に重要な地域である。

#### 【 世界自然遺産 】

1972年の第17回ユネスコ総会で「世界遺産条約」が採択されました。この条約は、顕著で普遍的な価値を有する遺産や自然地域などを人類全体のために世界の遺産として保護、保存し国際的な協力及び援助の体制を確立することを目的としています。日本は1992年にこの条約を締結しました。

- ①文化遺産 世界的な見地から見て歴史上、美術上、科学上顕著で普遍的価値を有する記念工作物、建造物群、遺跡
- ②自然遺産 世界的な見地から見て観賞上、科学上又は保全上顕著な普遍的価値を有する特徴ある自然の地域、脅威にさらされている動植物種の生息地、自然の風景地等
- ③複合遺産 文化遺産と自然遺産との両面の価値を有するもの

クライテリア（登録基準）は次のとおりです。

- ①地形・地質 過去の生命の歴史や地球の歴史の証拠となるような、重要な地形・地質等がよくあらわされている地域
- ②生態系 現在も進行中の生物の進化や生物群集の見本となるような、極めて特徴のある生態系を有する地域
- ③自然景観 ひときわすぐれた自然美をもった自然現象や景観を有する地域
- ④生物多様性 絶滅危惧種の生息地や、生物多様性の保全上最も重要な生物が生息・生育する地域

## （7）アイヌ民族

アイヌとはアイヌ語で「神（カムイ）」に対する「人間」の意で、「同胞」の意のウタリという言葉も使われています。アイヌ民族は、和人が北海道に入り込む前から北海道全体に住んでいました。自然現象、動植物、人間の作った道具など、すべてに「魂」が宿り、重要な動物は神の国（カムイモシリ）から使命を受け、姿を変えて地上に降りてきたものと考えていました。動物の靈魂をカムイモシリに送り返す儀礼にイオマンテがあります。

歌や踊りは信仰や生活と密接に結びついており、「杵つき歌」に合わせて踊る作業歌舞、「鶴の舞」などの模擬舞などがあります。これらのアイヌ民族の伝統的な踊りは国の重要無形民俗文化財に指定されています。

集落（コタン）は川や河口付近に作られ、共同墓地、水汲み場、船着き場があり、木やカヤで建てた家（チセ）に住み、数戸から数十戸で構成されていました。知床にもいくつかのコタンがあり、アイヌ語地名と遺跡が残っていることから、アイヌ民族が住んでいたことがわかります。

衣装はオヒョウ（ニレ科の樹木）などの皮で作る樹皮衣（アットゥシ）や草皮衣、獣皮衣、鳥羽衣などがあり、木綿や絹も用いていました。また、衣装には装飾のほか魔よけのため、切り伏せや刺繍の文様が入っていました。

一年を通じて動植物を食料とし、春から秋はギョウジャニンニク、フキなどの山菜を採取し、農耕ではヒエ、豆類などを栽培していました。秋から夏は狩猟の季節で、シカ、ヒグマ、カモなどの鳥獣、サケ・マス、川貝などの魚貝類、クジラ、トド、アザラシなどの海獣を捕り、食物の多くは乾燥させ保存食として備えていました。

## （8）産業との結びつき

知床周辺海域では、生物生産の豊かさに支えられて昔から漁業活動が活発に行われており、漁業を基盤産業として地域が発展してきた歴史的経緯があります。羅臼町地先海域では、潮間帯に始まる浅海域から水深1,000m近くの深海域までを漁場として、多くの魚種を対象とする多様な漁業があります。急峻な知床連山を背にして気象の変化が大きいというのに、流氷の時期を操業期間とする業種もあって、又、急深又は潮流の速い漁場も多く、厳しい気象・海象条件の中の操業が多いと言えます。

主な漁業には、次のようなものがあります。

- ・サケ及びスルメイカを対象とする定置漁業
- ・オニコンブ（羅臼コンブ）及びホタテガイを対象とする養殖業
- ・オニコンブ及びエゾバフンウニ等を対象とする、浅海域における漁業
- ・カレイ類、ホッケ、マダラ、タコ類、スルメイカ及びスケトウダラ等を対象とする刺し網はえ縄漁業等

羅臼地方卸売市場の鮮魚取扱高を見ると約半分がシロザケです。

水産資源については、これまでも調査等により資源動向の把握が行われ、漁業法及び水産資源保護法による採捕制限等や、「海洋生物資源の保存及び管理に関する法律」により海洋生物資源の採捕量、漁獲努力量の管理を行っています。また、漁業関係法令や漁業者・漁業団体の自主的な取り組みにより、資源の管理・利用に関する規制や資源の増殖などが行われており、資源の状況と漁獲のバランスを保つよう努力しています。

地元産業の結びつきとしては、このほかに、羅臼では冬のエコツアーとして「流氷の海の漁業見学体験」（スケトウダラの刺し網漁と流氷・ワシの観察）を実施しています。

## (9) 知床国立公園の利用適正化及び自動車利用適正化

知床国立公園の適切な保護と利用の推進を図るため、平成13年(2001)に学識経験者、地元関係団体、関係行政機関により「知床国立公園利用適正化検討会議」(以下、検討会議とする。)が設置されました。

知床が世界自然遺産に登録されたことを受けて、地元では様々な課題が発生しています。顕著に現れたのが観光客の増加です。

知床五湖地域では利用者集中による車両の渋滞、歩道の荒廃や歩道の踏み外しによる植生への影響も出ています。また、この地域はヒグマの高密度生息地域であり、利用者の安全確保のため知床五湖周回歩道の一部区間の利用制限や全面閉鎖を余儀なくされています。

羅臼湖地域では、木道の老朽化や歩道の泥状化が進行しており、歩道の拡幅や植生への影響が出ています。また、歩道入口は駐車禁止となっているため、アクセス方法は知床峠からの徒歩、路線バスなどしかありません。

知床連山地域では、一部登山道の荒廃や複線化、野営地等における植生への影響が見られ、また、羅臼岳の岩尾別登山口では駐車場からあふれた路上駐車が発生しています。

カムイワッカ地域では、湯の沢ルートへの歩道整備がされておらず、滑りやすさ等から、毎年、転倒等の事故の発生が見られ、さらに、落石による事故発生の可能性が指摘されたため、「平成18年(2006)度の立ち入りは一の滝まで」(カムイワッカ湯の滝安全確保対策連絡協議会)となりました。

また、「知床国立公園カムイワッカ地区自動車利用適正化対策連絡協議会」(以下、連絡協議会とする。)では、自動車の利用適正化対策として、平成11年(1999)度の試行を経て平成12年(2000)度から、路線バス及びシャトルバス以外の車両を規制し、平成18年(2006)度は、7月13日から9月20日までの70日間、知床五湖からカムイワッカ間の約11kmについて行いました。

現在は、道道知床公園線は落石防止工事のため知床五湖～知床大橋の間は、通年通行止めになっています。ただし、公園利用者のため上記の70日間はシャトルバスを運行しました。

なお、記載内容については2007年3月現在であり、今後、変更の可能性がありますので、下記に確認してください。

現在、検討会議では、このような課題を踏まえ、「利用の心得」、「利用の調整」などについて検討し、連絡協議会では、カムイワッカ地区の「自動車利用適正化対策」について検討しています。

### 【問い合わせ先】

#### ○ カムイワッカ地区の自動車利用適正化

知床国立公園カムイワッカ地区自動車利用適正化対策連絡協議会

事務局：環境省釧路自然環境事務所、網走支庁環境生活課、斜里町環境保全課

問い合わせ先：ウトロ自然保護官事務所 0152-24-2297

## (10) 自然保護の歩み(100平方メートル運動)

斜里町ウトロ以東、現在の知床自然センターのある幌別地区から知床五湖のある岩尾別地区の開拓が始まったのは大正でしたが、冬の強雪と流氷に閉ざされた自然環境が厳しく、もともと開拓に適した土地ではなかった上にバツタの発生による被害などで、離農と入植を繰り返し、昭和41年(1966)には開拓に終止符が打たれました。

その2年前の昭和39年(1964)に知床は、全国で22番目の国立公園に指定され、全国的にも秘境知床として有名になり、昭和46年(1971)の「知床旅情」の大ヒットは、空前の知床ブームを巻き起こしました。離農後の開拓跡地は、当時の「日本列島改造論」の中で不動産業者に買収されはじめ、その面積は100haにものぼりました。

そこで、イギリスのナショナル・トラスト運動をヒントに斜里町によって始められたのが、「しれとこ100平方メートル運動」です。土地の買い取りや植樹費用等にあたる金額8,000円を一口として、「しれとこで夢を買いませんか」のキャッチフレーズで寄付を募りました。この運動は、自然保護に関心を持つ全国の人々から賛同を得られ、また運動を支援する報道にも後押しされて、各地から寄附金が寄せられました。

運動は20年後の平成9年(1997)に土地の保全をほぼ終了し、現在は、植林した木を育て、森を作り、そこに生息していた野生の生き物たちを再び受け入れるという、自然の生態系の再生を目指す「100平方メートル運動の森・トラスト」として受け継がれました。

【 ナショナル・トラスト運動 】

各地の市民が募金などにより土地を買い取り、または自治体に買い取りを求めて、あるいは土地の所有者からの遺贈・寄贈を受ける、契約を結ぶことにより、その土地を保全、管理、再生、公開し、あるべき姿を後世に残そうとする運動。1895年イギリスの3人の市民によって「1人の1万ポンドより、1万人の1ポンド」をモットーに、資金を集めて、美しい海岸や歴史的遺産などを買い取って保存したのが最初のナショナル・トラスト運動といわれる